

清流の国ぎふ森林・環境税から学ぶ

学校法人佐々木学園 鶯谷中学校3年 若山 拓途

僕の住む岐阜県は、県土面積の八割が森林である。全国二位の森林県だ。しかし、僕はこの森林・環境税のことを全く知らなかった。六月に、父とホテルを見に行った時「清流の国ぎふのこと、ちゃんと知っとるか？」と聞かれたことで興味を持ち、学ぼうと思った。

ぎふの「清流」を守り育てるためには、自然の公益的機能をより高める取り組みが必要となる。その取り組みが「豊かな森づくり」と「清らかな川づくり」である。

僕は以前、きれいな川の水を使って美濃和紙をつくる「紙すき体験」に参加した。知らずに参加していたが、これは森林・環境税による支援を受けた活動だったようだ。関市で開催された第三〇回全国豊かな海づくり大会でもアピールされたように、森・川・海は一体である。紙すき体験は、川を中心として自然を身近に感じ、その大切さを学ぶよい機会だった。では、森を身近に感じられる体験もあるのだろうか。

豊かな森づくりのために、里山林の整備が行われている。そして、伐採された木によって公共施設等が木造化・木質化している。これは確かに、幼い子どもまでもが自然を感じられる良い取り組みだ。しかし、僕は一つ疑問をもった。いくら身近に自然を感じられるとしても、積極的な木の伐採は地球温暖化の面で良くないのではないかと。そこでこの取り組みの目的を調べていくと、木の伐採による利点が二つ程見つかった。まず、林内が明るくなって下草が生えることだ。たくさん木が生えている場所は、一見豊かな森のように見える。だが下草にとっては、それが遮光の原因となってしまうのだ。また、災害の防止に役立つという利点もある。生えている木があまりに多いと、それぞれの根が細くなってしまう。一方で、適度な間隔で生えているとそれぞれの根が太くなり、土砂くずれをせき止めることが可能になる。このような点から、適正な管理としての木の伐採とその利用は豊かな森づくりに大きく貢献していた。

県民税として納めているこの税は、「清流の国ぎふ」という呼び名を後世にも伝えるために非常に重要な税であった。環境保全活動を通して、森林・環境税の存在や目的についてより多くの人が考えるきっかけをつくることができたら何よりだと思う。なぜなら、この岐阜県の今を知ることがまず大事であり、その最初の一步こそがこれからの問題解決につながると思うからである。僕は、今回「清流の国ぎふ森林・環境税」について学ぶことで、自然を守るとはどのようなことか、深く考えることができた。そして、これからも岐阜県ならではの森林・環境税の有意義な使い道を思案していきたい。

このように、税はものの見方を考える転機にもなるので、とても良いものだった。